

2011年(平成23年)

第40号

(4月15日)

平安月報
The HEIAN monthly report

発行所：立正佼成会 京都教会
 発行責任者：渉外部長 宮地啓安
 〒605-0041 京都市東山区三条蹴上
 TEL (075)762-2211 FAX (075)762-2266

義援金集めだけでなく、復興への願いと想いを込めて～東日本大震災の被災者の方々へ～

京都市民に訴え募金を展開

3月13日、東日本大震災義援金・街頭募金が、青年部員の強い思いから始まった。市民の関心は高く、数時間のうちに数十万円の募金が集まった。

その後、街頭に立つ人が、青年部から京都教会全体広がり、日曜日や休日に京都市内の繁華街に立って実施している。

青年部では、これから夏場に向けて、被災地の方に「うちわ」を送ろうと考えている。街頭での募金に合わせて被災地への応援メッセージを集め、うちわに貼り付けて送るという計画だ。

5月15日の青年の日に向けて、この「うちわ」づくりを実施して、「今までは義援金を集めてきたが、これからは被災地へ気持ちを届けていきたい」としている。



教団としての取り組み

■犠牲者への慰霊、復興への祈りを捧げる

教会や支部、各家庭において、朝夕のご供養に際し、「東日本大震災犠牲者慰霊 早期復興祈願」供養を行っている。

■各分野からの支援

1)5億円の緊急支援(本会一食平和基金より)

本会一食平和基金より、各県の災害対策本部をはじめ市町村単位の災害対策本部や被災地で活動を展開する複数のNGO(非政府機関)へ、5億円の緊急支援を実施。順次各地での贈呈が行われ、被災者の生活再建、地域の復興に役立てられる。

2)WCRP日本委員会 第1次義援金を送付

WCRP日本委員会は、東日本大震災で被災した各自治体に、第1次義援金として総額1,100万円を送付。今後、義援金の勧募によりさらなる送付が予定されている。

3)新宗連「国際救援基金」1,000万円の拠出を決定

新宗連(新日本宗教団体連合会)は、震災被害に対し、「国際救援基金」から1千万円を拠出することを決定。第1次緊急支援として500万円、第2次復興支援として500万円を拠出。

「毛布をおくる運動」キャンペーン期間変更

「アフリカへ毛布をおくる運動推進委員会」は、東日本大震災に伴い今年度のキャンペーン期間を変更することになった。

●キャンペーン期間

5月 1日(日)～6月30日(木)

お知らせ(5月の教会行事)

- 5月 1日(日) 朔日参り 9:00～
- 10日(火) 脇祖さまご命日(家庭教育)
- 14日(土) やくしん勉強会 10:00～
- 15日(日) 釈迦牟尼仏ご命日/青年の日

※毎年開催していた「庭野平和賞シンポジウム」は東日本大震災のため中止。

時 事 刻 々

東日本大震災から1カ月を迎えた四月十一日、日本政府は海外からの支援に感謝の意を表明する広告を世界の主要紙に掲載した。

▼「絶望の時に世界の人々が希望と勇気を与えてくれた」「友人たちが示してくれた絆に深く感謝する」という内容だ。▼外務省が三月二十八日に発表したところによると、海外から134の国・地域と39の国際機関等から支援の申し入れがあったという。

▼仏教に『諸法無我』という教えがある。「この世には孤立しているものはない」という意味だ。東北の工場が被災したため、部品が入荷せず、アメリカの自動車工場がストップしたこともこの教えの通りだ。▼被災された方々に対して、決して他人事と思わず、自分たちにできることに取り組むことが大切だ。直接的な支援でなくとも、日頃の生活を見直し、改めるだけでも、必ず役立つはずだから。

平成23年、私たちは「すべてが仏さまのプレゼント 見よう 聴こう 観じよう 伝えよう」を実践していきます。

宗教協力の輪を広げよう ～新宗連の取り組み～

解脱会による春季慰霊式典 ～京都市深草墓園～

3月18日（金）、京都市深草墓園にて春季慰霊式典が執り行われた。京都市主催の式典では、門川大作家京都市長が式辞を述べ、柴田章喜京都市議会副議長、遺族代表が弔辞を述べ、献花を捧げた。

続いて、遺族有志代表主催による「京都市深草墓園春季法要」に入り、解脱会京都教区の奉仕により営まれた。解脱会理事の小林正二氏らが入場し、小林氏の導師により式典が始まり、齋員により霊前に生花と天茶が捧げられ、小林氏が「諷誦文奏上」を行った。一同で般若心経を読誦し、天茶の供養を捧げた。

春の彼岸は各宗派教団が順番に、秋の彼岸は仏教会の奉仕で行われている。

「新宗連京都府協議会青年部」発足

4月7日（木）、新宗連京都府協議会の青年部が正式に発足した。

新宗連の掲げる「新宗教教団の結束をもって世界平和の実現と人類福祉の増進に寄与する」するために、宗教協力を推進してきた先輩諸氏の志を、次代を担う若手青年も引き続き継承することを目的として立ち上がった。

行動計画として、「祇園祭鉦曳きボランティア」への参加。「京都の各教団訪問と勉強会」の実施。3か月に1度の「情報交換会」。青年同士の信仰を深めるための「望年会」の開催などを実施するとした。

お釈迦さまのご生誕を祝して

「おしゃかさまを讃える夕べ」京都仏教会主催

4月8日（金）、京都全日空ホテルにて、京都仏教会が主催して、「おしゃかさまを讃える夕べ」が開催された。

大本山「萬福寺御一山」による法楽が執り行われ、ボランティアケースワーカーの入佐明美から「地下足袋の詩」～歩く生活相談室三十二年～と題した記念講演が行われた。



豆菩薩たち、みんな楽しく、そして輝いた

～花まつり式典～

4月3日（日）、京都教会法座席において、少年部員40名、婦人部員30名が集まり、花まつりが開催された。4月8日の降誕会に先立ち、子どもたちでお釈迦さまの誕生を祝うものとして催された。



参加した子供たちは、両親や・仏さまに感謝することを誓った。また、東日本震災に被災に遭った子供たちへ勇気を届けようとメッセージづくりを行った。続いて、小学1年生の少年部入部式が行われた。



●いつでも、どこでも、だれにでも (佼成会のことば)

布教に出かける時などに、「この教えはいつでも、どこでも、だれにでもあてはまるのだから、信じて説いてくるんですよ」と先輩幹部から励まされることがあります。この言葉は教えの普遍性と永遠性をやさしく表現した言葉です。いわば「教えは絶対の真理」であることを意味しています。それを突き詰めていけば、「仏のいのちも、私たちが具えている仏性も絶対のもの」であることがわかります。ですから、仏性を礼拝し、自他の仏性を開頭することで、この娑婆世界を寂光土にできるとの確信も生まれてくるのです。教えに対する信をいっそう深めるために使われてきた言葉と

いえましょう。

ところで、「いつでも、どこでも、だれにでも」あてはまる教えですから、私たちの活動も普遍性と永遠性を持っているのです。仏教の教えは釈尊が2500年前に説き示されたのですが、今もその輝きを失いません。むしろ、末法の時代である現状にあって真価を発揮し、私たちに救済してくれます。そして、教えのありがたさに気づいた人が実践することによって、家庭も職場も救われる。それだけではありません。この教えの如くに人々が歩めば、地域社会や国家、ひいては世界の平和も実現するのです。それは明るい社会づくり運動や宗教協力などの諸活動を見ればわかることだと思います。

いずれにしろ、このように尊い教えですから、私たちはいつでも、どこでも、だれにでも自信を持って説き広げていきたいものです。

今月の言葉 ～謙虚に生きる～ 京都教会長・中村憲一郎

3月は「一日一笑」の実践をお勧めしましたが、11日に東日本を襲ったマグニチュード9.0の地震と津波の大惨事は、日本国内のすべての人々から「笑顔」を奪いました。亡くなられた多くの方々のご冥福を心からお祈り申し上げますとともに、多くの皆さんと心を一にして一日も早い復興のために微力を尽くして参りたいと願っております。

この度の大震災は、人々の「笑顔」を奪った半面、人々の心を「思いやり」の糸でつなぐという結果をもたらしました。地震発生直後の13日に、青年たちと共に京都市内で街頭募金に立たせて頂きましたが、市民の皆さんの心は優しさと温かさに満ちていました。「頑張ってるね」「これしかできないでごめんね」などの言葉を添えて募金して下さる姿に、私たちはどれほど勇気づけられたことでしょうか。この温かな真心は、被災地の皆さんにもきっと伝わるに違いない、そう強く感じました。

今月の会長法話は、「**謙虚に生きる**」です。会長先生は「恥を知ることは、常に謙虚でいられること」とし、ご著書『心田を耕す』の中で「恥の本質は、絶対なるものへの恐れと感謝を知らないこと」と記されております。わが国の先人たちは、常に自分を超えた存在に畏敬と感謝をもって参りましたが、科学万能の世の中になって、私たちは、いつしか自分を超えた存在である大自然の恩恵にさえ、手を合わせる謙虚さを失ってきました。会長法話は、2か月ほど前に提稿されたものです。まさか今日の惨状が起こるとは思いもよらなかったと思います。が、4月の降誕会に伝えられる積尊の大宣言「天上天下唯我独尊」は、この世に存

在するすべての命がいかにかに尊いか、在り難い、否、有り得ないものかを象徴した言葉です。「人身受け難し。今既に受く」というこの奇跡ともいえる厳粛な事実を、このたびの大震災を通して改めて噛み締めたいと思います。

会長先生は、なかなか謙虚になれない私たちに、「懺悔文—我れ昔より造れる所の諸々の悪業(あくごう)は皆無始の貪瞋痴に由(よ)る。身と口と意(こころ)よりこれ生ずる所なり。一切われ今みな懺悔したてまつる」を唱えることによって自己を見つめること、そして、今現在の自分につながる長い長い生命の歴史に思いをはせることを勧められます。悠久なる「いのち」の流れのなかで、今いのちあることの有り難さに気づくと、まさにあらゆるものが輝いて映り、周りど調和して謙虚に生きようという気持ちが湧いてくるというのです。

人間は「自力で生きている」と思うとき、感謝を忘れ、おごりと慢心に心が支配されます。「恩」という文字は、「口」のなかに「大」と書きます。「口」は環境や館を表し、「大」は手足をのばして寝ている様を表すといひます。毎日布団の上で、手足をのばして寝ることは、大自然や周りの多くの人々、家族、あらゆる動植物などの恩恵に浴していなければかなわない事なのです。

このたびの未曾有の大震災を目の前にし、改めて「**謙虚に生きる**」大切さを心に刻み、「**今を、今日を大事に生きる**」ことを今一度お誓いしたいと思います。

元気とほほ笑みをもって「ガンバロー日本!!!」

リサイクルで平和に貢献

京都教会では、リサイクルによって世界の平和に貢献できる取り組みを行っている。だれでも簡単に取り組めるものとして、多くの人への広がり期待されている。

1) エコキャップ

ペットボトルのキャップを回収し、地球温暖化防止と世界の子供たちにワクチンを提供することができる運動。

2月末現在、**88,000個**(ワクチン**110**人分)を収集した。

校成会では40教会が取り組んでいる。最高は中野教会(1,882,680)、次いで横浜教会(1,671,040)、江東教会(1,043,000)など。

2) 書き損じハガキ

テラ・ルネッサンスの取り組みを支援している。

未投函の年賀状や官製ハガキを収集し、郵便局で、切手シートに交換し、さらに現金に交換して、カンボジアやウガンダなどの元子ども兵の職業訓練支援に活用される。

3) 使用済みインクカートリッジ

同じく、NPO法人テラ・ルネッサンスの取り組みを支援している。

使用済みインクカートリッジをインクカートリッジリサイクル業者のエネックス株式会社に送付。回収したインクを再利用して、その収入を得る。

地雷に苦しむカンボジアの人々や、自立に向けて職業訓練に励む元子ども兵の訓練などに役立てられる。

庭野開祖の宗教観・平和観 「一乗の道」

《仏教倫理の原点》

中国の北京を訪れていた庭野開祖は、大勢の宗教者を前にして、常不軽菩薩(じょうふきょうぼさつ)の礼拝行の話をした。「杖をふるって打ちかかる人がいても、石を投げつける人がいても、常不軽はひるみません。杖や石が届かない所へ身を引いて、なおも、この人にこそ目覚めてもらわなければならないと拝み続けます。私はこの常不軽の精神こそが、世界からあらゆる争いをなくすことを可能にするものだと考えます。私たちがどのような体制によりどこを持とうとも、根底に相手の仏性を礼拝する精神がなかったならば、平和は招来されないでありましょう。この常不軽の礼拝行こそ、世界宗教者平和会議を推進している私の基本姿勢なのであります」。

庭野開祖はさらに話を続けた。「こんな話が伝えられております。お釈迦さまがご在世中のことです。一夜、パセナーディー王と妃のマリッカー夫人が、館の屋上で月見をされておりました。そのとき王が妃に向かって、『そなたには自分より愛しいものがあるだろうか』と尋ねられたのです。王は、妃が『もちろんございませとも。それは王のあなたです』と答えるのを内心、期待されていたのかも知れませんが、ところが妃の答えは、『はい、やはり自分がいちばん愛しゅうございます』というものでした。おそらく王は一瞬がっかりされたことでありましょう。

その王に、妃が『では王よ、あなたには自分より愛しいものがあるのでしょうか』と尋ねるのです。そこで王もあらためて考えてみたのですが、王もやはり『いや、私も自分がいちばん愛しい』と答えるしかなかったのです。これはパセナーディー王とマリッカー夫人の会話にとどまらないでありましょう。誰にとっても自分がいちばん愛しいのです。だからこそ『自分を愛する者は他を害してはならぬ』というのが、仏教倫理の出発点なのであります……」。

さらに、東京大学名誉教授の中村元先生から聞いた話を引用して、孔子が説く儒教の根本的な教えの一つである「仁」もまた、すべての人に慈しみと思いやりの心を持って接する大切さを教えたものではないか

と、当時まだ中国では復権していなかった孔子の教えに、あえて言及してみたのであった。

社会体制が異なる中国の各界の指導的立場にある人たちに、この話がどう受け取られるか多少不安があった。だか、庭野開祖が話し終えると大きな拍手が起こった。趙樸初先生が立って、一言、言葉を加えてくださった。「いま世界に危険が見えるのは、人々が常不軽と反対のことをしているからです。世界の宗教者が常不軽の精神をかかげて前進すれば、平和はきっと実現します。それを教えてくれた庭野先生は私のお兄さんです」。もう一度、大きな拍手がわき起こった。

《2度目の国連演説》

ソ連が中距離ミサイルに代えてSSD20を配備したのに対抗して、アメリカはパーシングIIを西ドイツに配備すると発表し、核軍備に対する世界の危機感はつのるいっぽうだった。ヨーロッパ各国を中心に急速に反核運動が高まっていた。第二回国連軍縮特別総会(SSDII)の開催が決定したのは、そうした背景の中であった。そのSSDIIの開催が1ヵ月後に迫っていた。

NGO(非政府機関)代表の提言が求められ、そのNGOの一つとして国際自由宗教者連盟(IARF)も、核軍縮の訴えをすることになった。その時、庭野開祖が第25代IARF会長を務めていたことから、軍縮特別総会での演説をするよう指名を受けた。庭野開祖にとっては、第1回国連軍縮特別総会に続く2度目の大役である。この第2回国連軍縮特別総会を前にして、立正佼成会では「立正佼成会核兵器廃絶・軍縮推進委員会」を発足させ、2,000万人を目標にした署名活動を中心に、全国的なキャンペーンを展開した。

青年を先頭に全国の会員が先頭に立ち、学校や職場で、さらに地域の家々を戸別訪問して「核兵器廃絶と世界の軍縮のための署名を」と呼びかけた。そして2ヵ月あまりで目標を上回る2,700万人の署名を寄せてもらうことが出来たのだ。署名運動と並行して、被爆当時の記録映画の上映会、原爆写真展、平和集会、講演会なども各地で開催された。

(つづく)

渉外部からのメッセージ

東日本大震災では、アジアや欧米諸国だけでなく、中東やアフリカ、中南米など世界各国から申し出があったそうです。一国の災害で多くの国から支援の声が上がっているのは、戦後65年、日本がどの国とも戦争をしなかったからではないでしょうか。また、これだけの震災を受けながらも、被災地での日本人の冷

静さを海外各紙が称賛しているようです。これは、日本には「他人に迷惑かけない」という昔からのマナーがあるからだと言われています。ここに、私たちの進むべき道が見えたように思います。

この月報を読まれて感想などがありましたらお気軽にお寄せ下さい。 RKK 京都教会 FAX 075-762-2266